

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：32620

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23660080

研究課題名(和文) 少子高齢社会での「主となる養育形態」についての研究

研究課題名(英文) Creation of the "principal form of nurturing" in an aging society with declining birth rate

研究代表者

新山 裕恵 (NIIYAMA, Hiroe)

順天堂大学・公私立大学の部局等・講師

研究者番号：20262181

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：「少子高齢社会での『主となる養育形態』」を明らかにし、我が国で健全な次世代育成が実現される道筋を明らかにすることが本研究の目的である。量的研究を主とした「質量ミックス」の手法で研究を進め、1)子育ての「大規模量的調査」2)国際比較 3)フィンランドでのフィールドワークの3本の下位研究から構成されている。フィンランドサイドは研究結果をJournal of Health Psychologyに投稿した(5月27日受付)。フィールドワークより、フィンランドでは基本的に小学校に入るまでは家で子どもを育てるとというのが一般に浸透した考えであり、今もそれは多くの国民の常識となっていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the principal form of nurturing in an ageing society with a declining birth rate, and to realize the route for healthy and safe development of the next generation. We have proceeded the mix method of Quantitative and Qualitative research, mainly conducting Quantitative. This study was constructed by 3 subresearch next, 1) The Large Quantitative Research on Child-raising in Japan : We used EPSI, SOC. There were 1st reports of EPSI (2002-2004) and EPSI added SOC (2005-2008) in English in the Journal of Japan Child and Family Research Institute internationally. 2) International Comparison of 1) : Eija Paarvilainen, co-researcher in Finland conducted EPSI and SOC, too. 3) The Fieldwork in Finland : There was an ordinary thought that a child should have been raised by family members in the house until the preschool-period, so it seemed Finnish common sense. Finland side has submitted the paper for the Journal of Health Psychology (27 May.2014, reception).

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：看護学、生涯発達看護学

キーワード：子育て 少子高齢化 国際比較 EPSI SOC First Report Finland International Comparison

## 1. 研究開始当初の背景

1) 日本は少子超高齢化時代となり、人口構造の変化と共に産業・労働など社会構造全体が大きく変化した。「養育」をとりまく社会状況や構造についても大きく変化がみられ対応が急がれているが、その本質の解明や将来的設計なくして政治的・政策的対応が困難なことは明白であり、長期的展望に欠けることはいえない。

2) 私は子育てについて考察を重ね、次の二つの疑問をもった。

(1) 日本は第二次世界大戦以後、「専業主婦の子育て」が「主となる養育形態(養育のかたち)」であったが、この「子育て」のかたちが「主となる養育形態」として最も良いものであったのかということである。

(2) 我が国ではこれから労働人口の不足により母親の就業機会はふえざるをえないと思われるが、その場合「子どもの保育に欠ける」部分を主に「保育の社会化」で対応して、将来の人材育成が成功するのであるかということである。

3) 「子育て」は各家庭で行うということが基盤と考えられているが、実は大きく社会的に育てているという側面があり、社会全体での「子育て」への対応により育った世代の人間的特性はその世代が成人し死ぬまで持続性をもつ。厚生労働省推計によれば 2040 年には全都道府県で 65 才以上の高齢者割合が人口の 3 割を超える。少子超高齢化社会とは障害をもつひとが増える社会と言えるのであるから、その「子育て」の成育目標は、思いやりのあるひと 状況の変化にうまく対応できるひと 困難にぶつかった時に自分で状況を分析し解決できるひと 協調性をそなえたひとがあげられ、どれも目標としては高度で手厚い「養育」を必要とする。中央教育審議会での答申で「幼児期からの心の教育の在り方について(平成 10 年 6 月 30 日)」および「青少年の意欲を高め、心と体の相件

った成長を促す方策について(中間まとめ)平成 18 年 9 月 28 日」より「子育て」への提言はあるが、主導と実効性に欠ける。

4) 私は幼少期の親や祖父母による「養育」を手厚くすれば多くの問題は解決の方向に向かうと確信している。上記の成育目標「3) ~」を満たす子どもの増加を主導するには、子どもが意欲をもって行動を起こすことが重要であり、サポートを保育士・幼稚園教諭等により施設で実施される必要もあるが、親や祖父母が時間を割いて子どもに寄り添い「養育」を行うことにより萌芽される事実を数値で証明する必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究を構成する 3 つの下位研究について述べる。

### 1) 子育てに関する「大規模量的調査」

日本の青年とその母親および父親に調査を行い「少子高齢社会での『主となる養育形態』、以下『養育形態』とする」の概要形成を行う。

### 2) 「1)」の調査での国際比較

「1)」の調査の妥当性・信頼性検証の為に、フィンランドでの「養育」の構造と特性を明らかにし、「養育形態」を発展的に形成する。

### 3) フィンランドでのフィールドワーク

フィンランドでの「養育」の構造と特性を明らかにし、「養育形態」を発展的に形成する。

## 3. 研究の方法

同じく 3 つの下位研究について述べる。

### 1) 子育てに関する「大規模量的調査」

「研究の方法」として、量的アプローチの相関関係的な研究デザインを採用し、実査はインターネット調査で行う(2 社連結を予定する)。日本の青年(18 歳~25 歳)とその母親(34 歳~69 歳)および父親(36 歳~69 歳)に、青年が受けた「養育の内容」と、青年における「人格の成熟(パーソナリティ・

コミュニケーション能力を含む)」を調査し、関連性を分析して「養育形態」概要形成を行う。対象数は青年・母親・父親を一組として800組～1000組を目指す。青年の「人格の成熟」を表す指標として、EPSIとSOCを用いた[倫理承認：順天堂大学医療看護学部、順看倫第25-28号、2013年(平成25年)12月12日付]。

EPSIは2002年から2004年で、EPSIとSOCは2005年から2008年で、日本の青年・成人の「人格の成熟」を表す指標として用いられ、日本子ども家庭総合研究所紀要で毎年1編ずつ報告されている。要約は英語で作成されておりこれらがEPSI単独での、またEPSIとSOCを併用した世界で最初の研究報告となる。

## 2)「1)」の調査での国際比較

フィンランドとの国際共同研究を遂行した(タンペレ大学のEija Paarvilainen教授、タンペレ大学倫理承認・平成26年1月)。

日本と同じく、フィンランド大学生の「人格の成熟」を表す指標としてEPSIとSOCを用いた。フィンランドでは、大学生が受けた「養育の内容」を、「子どもの頃の家庭での心理社会的要因」ととらえた。対象数は日本の調査数と同じ、フィンランド大学生800～1000人を目指す。

## 3) フィンランドでのフィールドワーク

### a) 倫理承認の過程

#### (1) 日本での倫理承認取得までの経過 (2012年5月～2012年11月)

新山は、2012年5月に、フィンランドの「国立医学研究倫理委員会(National Committee on Medical Research Ethics、以下、TUKIJAという)」に問い合わせを行い、その返答を2か月後に受けた(2012年7月)。

「の返答」直後に、フィンランド看護協会・International Affairs and Knowledge Managementに、フィンランド国内の保健学・看護学で用いられる研究での「倫理指針」について問い合わせを行い、担当者より「フィンランドでの保健学および看護学研究の倫理指針となっているHealth Science部門の『倫理指針』: the Ethical Principles of Research in the Humanities and behavioral sciences and Proposals for Ethical Review、2009」を2012年8月に紹介されそれを取り寄せ熟読した。他に多くの保健学・看護学にかかわる日本国内および国際的な倫理指針を検討し(「TUKIJA」倫理指針」「WORLD MEDICAL ASSOCIATION」のヘルシンキ宣言)、「看護学教育における倫理指針」、日本看護協会の「看護研究における倫理指針」、国際医学団体協議会作成・世界保健機関協力の「人を対象とする生物医学研究の国際的倫理指針」、国際医科学評議会の「疫学研究の倫理審査のための国際的指針」、国際看護師協会の「看護研究のための倫理指針」)次に、日本国内で「フィンランドフィールドワーク研究」の倫理承認を取得した[順天堂大学医療看護学部倫理承認、順看倫第24-36号、2012年(平成24年)11月12日付]。

#### (2) フィンランドでの倫理承認不要が明らかになった経過(2012年5月～2013年3月)

フィンランドでフィールドワークを実施する場合には、フィンランド国内5つの地域のうち自分が最も研究的に頻繁に関わる地域で倫理申請をフィンランド語で行う必要があることが、フィンランドの「TUKIJA」担当者より新山に告げられた(2012年7月16日)。

新山は2013年2月末に翻訳(日本語からフィンランド語)とフィンランドでの手続き

を依頼した担当者(フィンランド在住日本人大学生)よりフィンランド・タンペレ地域倫理委員会の見解、すなわち日本での倫理承認により本研究でのフィンランドフィールドワークは実施可能の見解を得た。

b)(フィールドワークでの)本調査について:研究参加に同意の得られた家族に数日間ホームステイに入り、フィンランドでの「養育」の構造と特性を明らかにし、「養育形態」を発展的に形成する。新山は、予備調査として2012年8月に21日間フィンランドに滞在し、3組の家族にホームステイに入り調査方法を検討した。

#### 4. 研究成果

同じく3つの下位研究について述べる。

##### 1) 子育てに関する「大規模量的調査」

2014年2月にインターネット調査を実施した。対象は、青年とその母親および父親を一組として826組、青年とその母親か父親(片親)で39組の計865組である。調査は1社目で必要対象数が確保されたため、2社目への依頼は行わなかった。現在分析を進めている。

##### 2) 「1)」の調査での国際比較

Eija Paarvilainen 教授の研究チームは、2014年2月にタンペレ大学学生に調査を実施し898人が分析対象となった。「子どもの頃の家庭での心理社会的要因」とSOC及びEPSIとは強い関連があり、SOCとEPSIも相互に強い関連のみられることが明らかになった。

##### 3) フィンランドでのフィールドワーク

新山は、2013年9月26日から11月7日まで44日間フィンランドにフィールドワークに入り、研究参加に同意の得られた8都市に住む10家族にホームステイに入った。その結果、フィンランドでは基本的に小学校に

入るまでは家で子どもを育てるとというのが一般に浸透した考えであり、今もそれは多くの国民の常識となっていることが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計1件)

新山裕恵、少子高齢化社会における「養育」について、順天堂大学医療看護学部医療看護研究、査読有、9巻1号、2012、5-11.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

新山裕恵 (NIYAMA Hiroe)  
順天堂大学医療看護学部・講師  
研究者番号: 20262181

##### (2) 研究協力者

Eija Paavilainen  
School of Health Sciences (Nursing  
Science), University of Tampere  
Finland, PhD, Professor  
Professorial Fellow  
(Research Collegium 2011-2012)

Irene Kontkanen  
School of Health Sciences (Nursing  
Science), University of Tampere  
Finland